

イエス・キリストの啓示 - ナンバー18

父たちの罪

Jeff Pippenger

2023-11-19

1856年、従来はフィラデルフィア的であったミラー派アドベント主義は、ジェイムズとエレン・ホワイトによってラオデキア的であるとされ、ジェイムズ・ホワイトはその後、『レビュー・アンド・ヘラルド』誌を通してこの運動にラオデキアのメッセージを推進し始めた。同年、同じ刊行物において、ホワイト夫妻が第一子にその名を与えるほど高く評価していたハイラム・エドソンによる全8回の連載で、レビ記26章の「七つの時」に関するより増し加えられた光も示された。この連載は将来に完結されるとの約束で終わったが、その後二度と再登場することはなかった。第一の天使の運動がフィラデルフィアからラオデキアへと移行する転換点において、この運動はレビ記26章の「七つの時」につまずいた。それは、神の天使たちがウィリアム・ミラーを導いて認識させ、宣べ伝えさせた、まさに最初の「時の預言」を表していたのである。

「七つの時」は、ミラー派の神殿の土台の隅のかしら石であった。聖なる土台に関するあらゆる預言的な象徴はキリストの象徴である。なぜなら、キリスト以外に据えることのできる土台はないからである。

だれも、すでに据えられている土台、すなわちイエス・キリスト以外の土台を据えることはできません。第一コリント 3:11

キリストは土台であるだけでなく、建てる者たちに退けられ、その後彼らがつまずいた礎石でもある。彼こそが、最終的に隅のかしら石となる石である。ミラー派の歴史において、「七つの時」はその隅のかしら石の象徴であった。

キリストは一週の間、多くの者と契約を確証された。イスラエル北王国に対する「七つの時」の預言の構造（ハイラム・エドソンが未完の八編の記事で特定したものは、ダニエル書九章二十七節の成就としてキリストが契約を確証された預言的な一週と同一の構造を再現していた。キリストがイスラエルを集めておられたその一週は、キリストがイスラエルを散らされた一週と同一の構造である。古代イスラエルの離散は二千五百二十年であり、霊的イスラエルの集めは二千五百二十日であった。キリストは契約を確証するためにイスラエルを集め、またその契約をめぐる争いのゆえにイスラエルを散らされた。「七つの時」をミラー派の神殿の礎石と見なすことは、キリストを礎石と見なすことと完全に一致している。その石を退けることは、キリストを退けることにほかならない。

キリストが、1856年に、キリスト教史上初めてラオディキアの戸のところに立って叩かれたとき、建てる者たちが退けようとしていた躓きの石に関する知識の増加をもたらそうとしておられた。七年後、あるいは言い換えれば、象徴的な二千五百二十日後、ラオディキア的なアドベンチズムは戸を閉ざした。残念なことに、アドベンチズムはその知識の増加を見ようとはしなかった。人がつまずく石とは、見えていない石のことだ。しかし、それでもそれはそこにある。

わたしの民は知識がないために滅ぼされる。あなたが知識を退けたので、わたしもあなたを退け、あなたをわたしの祭司とはしない。あなたが自分の神の律法を忘れたので、わたしもあなたの子らを忘れる。ホセア書4章6節。

「七つの時」の呪いは南ユダ王国に対するもので、紀元前677年に始まり、ダニエル書8章14節の二千三百年とともに1844年10月22日に終わった。「七つの時」は、アドベント運動の「土台であり中心の柱」として特定されているまさにその預言の一部である。アドベントイズムの土台であり中心の柱は、いくつかのほかの預言とまさに同じ時に成就した。「七つの時」、二千三百日、マラキ書3章、ダニエル書7章13節、そしてマタイ25章の十人の乙女のたとえは、すべて1844年10月22日に成就した。1844年10月22日という日はアドベント運動の基礎となる日付であり、その日付に関連して特定された命令はただ一つである。

また、私が海の上と地の上に立っているのを見た御使いは、天に向かって手を上げ、とこしえに生きておられる方、すなわち天とその中にあるもの、地とその中にあるもの、海とその中にあるものを創造された方にかけて誓った。「もはや時はない。」黙示録 10:5, 6.

ホワイト姉妹は、地と海の上に立っていた黙示録第10章の天使をイエス・キリストであるとしています。

ヨハネに指示を与えた力ある御使いは、他ならぬイエス・キリストであった。右の足を海に、左の足を陸に置いていることは、サタンとの大争闘の終幕においてイエスが果たしておられる役割を示している。この位置は、全地に対するイエスの至上の力と権威を示している。セブンスデー・アドベンチスト聖書注解 第7巻、971頁。

キリストは、御自身の至高の権威を表すために、海と地の上に立つ位置を取られた。次いで御手を上げ、「もはや時はない」と命じられた。キリストはミラー派と契約を結ぼうとしておられ、アブラハムと契約を結ばれたときに彼に命じられたのと同様に、彼らに一つの命令をお与えになった。アブラハムには男子に割礼を施すよう命じられた。モーセの時代に選ばれた民と契約を結ばれたときには、多くの命令をお与えになり、その中には祭司だけが契約の箱に触れることができるという指示も含まれていた。1844年10月22日に御手を上げ、これ以後、預言的な時が聖書の預言に取り入れられることはないと言われた。イエスは御使いたちの雲の中で天に昇られたとき、「時と季節」について語られ、こうして、旗印としての二人の証人の昇天を型どられた。そのときお命じになったことは「時と季節」に関することであった。

それで彼らが一緒に集まったとき、彼に尋ねた。「主よ、今この時にイスラエルのために国を回復してくださるのですか。」彼は彼らに言われた。「父がご自分の権威によって定められた時や時期は、あなたがたの知るところではない。しかし、聖霊があなたがたの上に臨むとき、あなたがたは力を受ける。あなたがたはエルサレムで、ユダヤの全土とサマリアで、さらに地の果てに至るまで、わたしの証人となる。」使徒の働き 1:6-8.

イエスは、時と季節がないとは言わなかった。なぜなら、ソロモンを通して語って、「時と季節」があることを確証しておられたからである。

何事にも時期があり、天の下のすべての営みに時がある。(伝道の書 3:1)

聖書の記録の中には、「驚くべき数え手」であるパルモニを証しする「時と時期」があるが、1844年10月22日以降、神の民は時日に基づく預言的メッセージを二度と掲げてはならないと命じられている。イエスが昇天される直前に弟子たちに与えられた勧告は、黙示録11章で彼の清められた民が旗印として高く掲げられる直前の歴史を表しており、それは1844年10月22日に彼が与えた命令と一致している。アドベンチズムの礎が据えられたその日に、キリストは、時日に基づく預言的メッセージはこれ以上あってはならないと命じられ、黙示録11章の二人の証人の昇天を象徴するご自身の昇天においても、その命令を繰り返された。

私たちのすべての兄弟姉妹は、主の来臨に関して、また特別な意義をもつその他の約束に関して、主がみことばを成就される時を定めようとする者に十分に警戒しなさい。『父がご自身の権威によってお定めになった時や時期を、あなたがたが知ることは許されていない。』偽りの教師は神のみわざに非常に熱心に見え、彼らの理論を世と教会の前に押し出すために資力を費やすかもしれない。しかし、彼らは真理に誤りを混ぜるので、そのメッセージは欺きであり、魂を誤った道へと導く。彼らに対しては、彼らが悪人だからではなく、偽りの教師であり、偽りに真理の印を押しそうと努めているがゆえに、立ち向かい、反対しなければならない。『牧師たちへの証言』、55。

ホワイト夫人は、主の再臨に限らず、特別に重要な事柄の時期を特定するような「時のメッセージ」は、私たちに決して与えられないとはっきり述べている。ミラー派運動の主題であった時の預言は1844年10月22日をもって終わり、その土台となったこの日付に関連して与えられた唯一の命令は、今後、神のメッセージを述べ伝える際に時期設定を決して用いてはならないということであった。

第一の天使の運動が始まったとき、フィラデルフィアからラオディキアへの移行のまさにその時点で、ミラー派運動の基礎的真理に関して、より大きな光が与えられた。七年後、すなわち象徴的な二千五百二十日後、あるいは「荒野」を経たのち、1863年に、「七つの時」の礎石は建てる者たちによって退けられた。

第三の天使の終末の運動において、ラオデキアからフィラデルフィアへの移行のまさにその時点で、先祖の罪の告白を含む試練が与えられる。先祖たちの土台を試すものは「七つの時」であり、それが彼らの礎石であった。彼らの先祖が自らの礎石を無視したように、終末の運動は、基礎となる日付に結びついたただ一つの命令を無視するのだろうか。

そうだ。彼らはまさしくそのことをした。彼らは父祖の罪を繰り返した。

彼らの父祖は、その基礎となる期日に罪を犯したのではない。というのも、ほかならぬその期日において彼らはまだフィラデルフィアの人々だったからだ。彼らの父祖が基礎となる試練に敗れたのは、ラオデキヤへと変わり、「七つの時」とそれに伴う増し加わる光を退けたときである。

1863年の彼らの根本的な失敗に先立って、キリストが彼らのラオデキア的な心の戸を叩き続けた7年間があった。7年は「七つの時」と「荒野」を象徴している。1856年から1863年にかけての「荒野」の後、彼らは根本的な試験に失敗した。

第三天使の運動の第一の失望において、神の民は罪を犯した。基礎となる日付に直接結びつけられていた唯一の命令を退けたからである。彼らは、本来よくわかっていながら、時の予測を預言のメッセージに取り込むことを選んだ。そうすることによって彼らは、モーセが自分の子に割礼を施すのを怠った罪と、ウザが自分がしてはならないと知っていたのに契約の箱に手を触れた罪とを、繰り返したのである。第三天使の運動は、自分たちが正しくないを知っていたことを行ったのだ！もし誰かがその事実を塗り隠したいというのなら、ペンキ缶の残りも使って、モーセとウザがいずれも罪を犯し、神の御心に対する反逆を現したという真理まで覆ってしまうがよい。彼らは、すべての改革の流れが前方を指し示してきた、最後の改革の流れにおける第一の失望を、型として示していたのである。改革の流れにおける第一の失望の実例は、アルファとオメガのしるしを帯びており、そこに記された記録は、たとえ神の民がそれによって益を受けることを拒むとしても、神の民の益のためのものである。

第一の天使の運動には、『七つの時』の荒野を象徴する七年の期間が与えられ、『七つの時』の光とともにラオデキヤのメッセージを受け入れるためのものであった。『七つの時』の呪いとは、主の御口から吐き出されるという呪いである。1863年、彼らは『呪い』を含むエリコの再建という行為を繰り返した。1856年から1863年までの七年間は、彼らに『七つの時』の呪いをもたらした古代イスラエルの父祖たちの反逆の罪の縮図である。現代イスラエルは1863年にその父祖たちの罪を繰り返した。

第三の天使の運動は、モーセとウザがそうであったのと同じほど確実に、第一の失望の試練に失敗した。彼らはその後、通りで殺され、三日半の「荒野」の期間に入った。彼らはいま、助け主の響きによってからだとして形づくられつつある。助け主の響きは荒野の「声」を通して与えられており、彼らはいま、期日設定ではなく「七つの時」の試練に直面している。彼らはすでに期日設定の試練に失敗した。

彼らは、「七つの時」が正当な真理であると信じているかどうかを試されているのではない。というのも、彼らは以前に、「七つの時」を妥当な預言として受け入れていると証しを立てているからである。彼らは、二千五百年にわたる離散の預言を信じていると告白している。だが、彼らは「七つの時」に関する新たな試金石となる光があることに気づいていないかもしれない。彼らはいま、1856年に彼らの父祖が立っていたところに立っている。新しい光とは、黙示録11章の三日半は、単にフランス革命を指し示すだけでなく、今や現在の真理としての現実である、ということである。

七つの雷の隠された歴史が明らかにされることと、第七の封印が開かれることは、イエス・キリストの黙示が今まさに封印を解かれつつあることを示す二つの証しなのだろうか？ もしそうなら、黙示録全体は終わりの時代について語っているというのは本当なのだろうか？

それが本当なら、三日半は乙女のたとえにおける遅れの時を表しているのだろうか？ もしそうなら、「七つの時」という対処策は、2020年7月18日のナッシュビルの予言に参加した人々が従うべき命令を実際に表しているのだろうか？

おお！あなたへの試練がある！目を覚まし、自分が待機の時期にいることに気づいた人たちは、三日半の終わりに、自分の罪と自分の父の罪を本当に悔い改めなければなら

いのか？ 予言の中で時を用いるなという命令を無視することは、本当に罪だったのか？

ナッシュビルに関する成就しなかった予言が何らかの形で神の本来のご計画であったとする立場を取り、その後もその主張を擁護し続けてきた人々に対して、私は、神の預言に期日を定めるといふ罪に加えて、もう一つの指摘を加えたい。ナッシュビルに関する偽りの予言で起こったことは、1844年に与えられたキリストの命令に対する反逆の現れにとどまるものではなかった。それは、アドベンチズムの外にいる人々に、預言の霊に記された予言が誤っていると告げる行為だった。それは預言の霊の著作に汚名を着せるものであった。それは、この世の人々に、エレン・ホワイトの著作がジョセフ・スミスやノストラダムスの著作と同程度に重要であるとする証拠を与える。エレン・ホワイトの尊い言葉は、私たちの反逆の卑しい言葉によって汚された。それは、神のことばであるキリストに対する反逆であっただけでなく、同時に預言の霊に対する反逆でもあった。ヨハネがパトモスと呼ばれる島で迫害されていたのは、彼が聖書と預言の霊よりも自分の人間的意見を上位に置いたからではなく、むしろそれら二人の証人に従ったからである。

私ヨハネは、あなたがたの兄弟であり、苦難における仲間、そしてイエス・キリストにある御国と忍耐にあずかる者として、神の言葉のため、またイエス・キリストの証のために、パトモスと呼ばれる島にいた。黙示録 1:9

私たちは最初の失望のときに、私たちの父祖であるモーセの罪を繰り返してしまい、これを告白しなければならない。私たちは今や1856年にいるのだから、これを告白する必要がある。今も当時と同様に、「七つの時」について新しい光がある。1856年に初期の運動がフィラデルフィアからラオデキアへの移行期にあったように、私たちは今、ラオデキアからフィラデルフィアへの移行期にいる。1856年には、私たちの父祖たちは「七つの時」に関する知識の進展の公表をやめた。私たちはその光の公表を止めることはできないかもしれないが、この光に対して心の扉を閉ざすことは確かにできる。私たちは、初期のセブンスデー・アドベンチストの築き手たちがそうしたように、その石が実際にはそこにはないふりをして、なおもそれにつまづき続けることができる。私たちの問題は、裁きがすでに始まっているため、私たちには頭を砂に突っ込んでいられるほどの1世紀以上の時間はないということだ。

もし私たちが、物事の終わりはその始まりによって示されるという原則をもってアルファでありオメガであるお方に教えていただくなら、ナッシュビルの予言が私たちの父祖によって型として示されていたことを、アルファでありオメガであるお方が明らかにしておられるのを容易に見て取ることができます。私たちがこの真理を認めるとき、予言以来、その失敗した予言を正当化するために何らかの人間的論理をひねり出してきたあらゆる試みは、いちじくの葉にすぎなかったという現実と直面することになるでしょう。そのとき、私たちが敵の地にいる間、神は私たちと共に歩んではおられなかったことが分かるでしょう。神はそこにおられました、それは心の戸を叩き、入ることを求めておられたという意味においてのみです。もし人間的論理といういちじくの葉を取り除かれるなら、私たちがナッシュビルの予言を正当化するために用いてきた否認、あるいは欠陥のある人間的論理こそが、私たちがキリストに逆らって歩んできたことの証拠であることも見えてくるかもしれません。

1856年、フィラデルフィア的アドベンチズムはラオデキアへと変じ、彼らはそれを自覚していた。主は女預言者とその夫の言葉を通してそれを確証した。そのラオデキアの人々の心の戸口に立って、キリストは中に入って彼らと共に食事をすると申し出た。彼が食事のために携えてきた食物は、「七つの時」の礎石であった。彼らは拒んだ。

2023年、最後の運動は、ラオデキアからフィラデルフィアへと今や移行しつつある。というのも、八番目の教会は七つの教会のうちにあるからである。アルファでありオメガである主は、ご自身の「真理」の言葉を通してそれを確証された。キリストはいま、最近死んで乾いた骨となった者たちの戸口に立ち、内に入って彼らと食事をすると申し出ておられ、そして、彼らと分かち合おうとしておられる食事は、1856年に彼らの父祖と分かち合おうとされたものとまったく同じである。それは、1856年に彼らの父祖にとってそうであったような、「七つの時」の教理の単なる細部ではない。いや、それは「七つの時」という苦い治療薬であり、その治療薬には、しばしば飲み込みがたい種類の謙遜が求められる。

主の言葉が再び私に臨んだ。「人の子よ、ツロの君主に言え。主なる神はこう言われる。おまえの心が高ぶり、『私は神だ。海のただ中で神の座に座している』と言ったからだ。しかしおまえは神ではなく人にすぎない。たとえおまえが心を神の心のようにしても。見よ、おまえはダニエルよりも賢い。彼らがおまえから隠すことのできる秘密は一つもない。」 エゼキエル書 28:1-3

もしかすると、ナッシュビルの予測に参加した私たちの方が、ダニエルより賢明なのだろうか？

彼の治世の第一年に、私ダニエルは、主の言葉が預言者エレミヤに臨み、エルサレムの荒廃が七十年で満ちると述べられているその年数を、書物によって悟った。そこで私は、祈りと嘆願をもって、断食し、荒布をまとい、灰をかぶって、主なる神に心を向けて求めた。私は私の神、主に祈り、罪を告白して言った。「ああ主よ、大いなる、恐るべき神よ。あなたを愛し、あなたの戒めを守る者に契約と慈しみを保たれる方よ。私たちは罪を犯し、不義を行い、悪をはたらき、反逆しました。すなわち、あなたの掟と裁きから離れました。さらに、あなたのしもべである預言者たちが、あなたの御名によって私たちの王や君たち、父祖たち、そしてこの地のすべての民に語った言葉に、私たちは耳を傾けませんでした。ああ主よ、義はあなたのものです。しかし、恥は私たちのものです。今日のように、ユダの人々にも、エルサレムの住民にも、近くにいる者にも遠くにいる者にも、あなたが彼らを追いやられたあらゆる国々にいる全イスラエルにも、恥はあります。彼らがあなたに対して背いたからです。ああ主よ、恥は私たちのもの、私たちの王、君たち、父祖たちのものです。私たちがあなたに罪を犯したからです。私たちの神、主には憐れみと赦しがあります。私たちが主に背いたにもかかわらず。私たちは、主なる私たちの神の声に従わず、主のしもべである預言者たちによって私たちの前に置かれた律法に従って歩みませんでした。まことに、全イスラエルはあなたの律法を犯し、離れ去って、あなたの声に従わないようになりました。それゆえ、神のしもべモーセの律法に書かれている呪いと誓いが私たちの上に注ぎかけられました。私たちがあなたに罪を犯したからです。こうして主は、私たちに対して、また私たちを裁いた裁きつかさたちに対して語られた御言葉を、私たちの上にもたらした大いなる災いによって成就されました。天の下で、エルサレムに行われたよ

うなことは、かつて行われたことはありません。

モーセの律法に書かれているとおり、これらすべての災いが私たちに臨みました。それでもなお、私たちは自分たちの不義から立ち返ってあなたの真理を悟るために、主なる私たちの神の御前に祈りをささげませんでした。ゆえに、主はその災いを見張っておられ、それを私たちの上にもたらされました。主なる私たちの神は、そのなさるすべてのわざにおいて義であります。というのも、私たちがその御声に従わなかったからです。今や、エジプトの地から力強い御手をもってあなたの民を導き出し、今日のとおりあなたの名をとどろかせられた主なる私たちの神よ、私たちは罪を犯し、悪を行いました。主よ、あなたのすべての義にしたがってお願い申し上げます。あなたの都エルサレム、あなたの聖なる山から、あなたの怒りと憤りを退けてください。私たちの罪と先祖の咎のゆえに、エルサレムとあなたの民は、周囲にいるすべての者の嘲りとなってしまいました。それゆえ今、私たちの神よ、あなたのしもべの祈りと願いをお聞きください。主の御名のために、荒廃したあなたの聖所の上に御顔の光を輝かせてください。わが神よ、御耳を傾けてお聞きください。御目を開いて、私たちの荒廃と、あなたの名で呼ばれているこの都をご覧ください。私たちが御前に願い求めるのは、私たちの義のゆえではなく、あなたの大いなる憐れみのゆえです。主よ、お聞きください。主よ、お赦しください。主よ、耳を傾けてお働きください。ためらわないでください。わが神よ、あなたご自身のために、あなたの都とあなたの民は、あなたの名で呼ばれているのですから。そして私が語り、祈り、自分の罪と私の民イスラエルの罪を告白し、私の神の聖なる山のために主なる私の神の御前に願いをささげていたとき、まさに、私が祈りのうちに語っていたとき、初めに幻の中で見た人物、すなわちガブリエルが、急ぎ飛んで来て、夕べの供え物の時刻ごろに私に触れました。彼は私に知らせ、私と語りて言いました。「ダニエルよ、今、私はあなたに洞察と理解を与えるために出て来た。」 ダニエル書 9:2-22